

黄曉芬編著

『交趾郡治・ルイロウ遺跡Ⅱ』

——二〇一四—一五年度発掘からみた

紅河デルタの古代都市像——

向井 佑介

ルイロウ遺跡は、ベトナムの首都ハノイの東およそ一九キロメートル、バクニン省トゥアンタイン県タインクオン社に所在する古城址を中心とした遺跡群の総称である。紅河のデルタ地帯中央にルイロウ城址の土塁と外濠が断続的に残存し、GPS調査では西壁二九〇メートル、東壁二六八メートル、北壁六〇三メートル、南壁五一二メートルという計測値が得られている。

ルイロウ (Luy Lâu) という遺跡名は、歴史的地名「羸婁」に由来する。『漢書』地理志は漢の武帝が元鼎六年（前一一一）に設置した交趾郡十県のうち羸婁を筆頭にあげており、当時の交趾郡治はそこにあつたとする説が有力である。ただ、交趾郡治の所在については諸説があり、またこのルイロウ城址が漢代以来の羸婁城と同一であるのかについても議論がある。

評 編著者の黄曉芬氏はもともと漢墓を中心とした中国考古学の研究者で、漢文化のひろがりとその受容の実態を究明するため、中

国とその周辺地域をフィールドとして調査研究を継続してきた。二〇一三年度から二〇一六年度には科学研究費補助金を受けて、秦漢の都城と地方郡県の調査研究を推進するとともに、ベトナム国家歴史博物館との間に学術交流協定を結び、ルイロウ遺跡の国際共同調査に着手した。本書はそのうち二〇一四年度と二〇一五年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。

本書評では、まず本書の構成と各章の内容について整理する。その上で、研究史上における本書の意義を述べ、あわせて遺跡と遺物の解釈をめぐる若干の問題を指摘することにした。

一

最初に本書の構成を記し、次いで各章の内容を紹介していく。執筆者は節ごとに異なるため、括弧内に担当者名を記した。

- 第Ⅰ章 研究課題と方法
- 第Ⅱ章 ルイロウ遺跡の景観調査と立地分析
- 第Ⅲ章 ルイロウ城址の基本層位・遺構
- 第Ⅳ章 ルイロウ墳墓群の分布調査
- 第Ⅴ章 出土遺物の考察
- 第Ⅵ章 出土遺物の自然科学的分析
- 第Ⅶ章 ルイロウ出土新資料の考察と認識
- 第Ⅷ章 交趾郡治・ルイロウの都市像と歴史的 성격

第Ⅰ章では本書の研究課題と方法が提示される。本研究では、中国文明の受容と地域文化の変容という視点から、交趾郡治・ル

イロウ遺跡に対する発掘調査を実施した。そして、考古学・文献史学・自然科学諸分野の学際的研究により、ルイロウの都市像と漢による南方支配の実像、そして古代東アジア世界における文化伝播の様相をさぐろうとしたのである（黄曉芬）。

第二章は遺跡の立地と景観について、GPS測量や衛星リモートセンシングデータの解析結果とあわせて報告する。城址は紅河から分岐したドウオン川右岸にあり、旧河道の自然堤防上に位置する（宮原健吾・宇野隆夫）。また城址の南北軸線を北に延長していくと、ドウオン川北岸の梁可山（仏跡山）にいたることが確認され、その丘陵がルイロウ城の選地に際してランドマークの役割を果たしたと推定された（惠多谷雅弘）。

第三章は発掘調査区の層位と遺構を報告する。層位の年代は、下から順にⅠa期（前漢後期～後漢前期）・Ⅰb期（後漢）・Ⅱ期（三国～東晋）・Ⅲ期（南朝）・Ⅳ期（隋唐～大越）と区分される。発掘の結果、内城北門らしき遺構を検出し、内城北東隅では二時期の土塁とその基部の碑列、初期の濠を確認した。ほかの地点でも瓦や陶磁器が出土し、ドンソン系銅鼓の鑄型など冶金関連遺物も発見された（黄・木下保明・會下和宏）。

第四章では、周辺墳墓群の調査成果が報告される。これまでに城址の東方約〇・五～一・八キロメートルに分布する清姜墓区、東方約一・八～二・五キロメートルに所在する参亜墓区、東南五キロメートル前後に分布する月德墓区が知られており、北方二キロメートルあまりの地点でも磚室墓群を確認した（黄・黎文戦）。清姜墓区では墳墓二基の測量を実施し、磚などの特徴から後漢後期以降の年代が想定されている（會下・池田拓）。

第V章は金属器・冶金関連遺物・磚瓦・陶磁器・木器などの出土遺物を報告したものである。金属器には銅鏃と五銖銭のほか、鉄製の鎌・鏝・釘などがある（黄・佐藤浩司）。埴埴・輔羽口・銅鉄滓など冶金関連遺物の出土により、一部の金属器は現地で鑄造されたことがわかる。そのなかにドンソン系銅鼓の鑄型片が含まれることは、中国系青銅器とともに在地系銅鼓が鑄造されたことを示唆する（黄）。磚（黄・木下・小鹿野亮）・瓦（黄・木下・會下）・陶器（會下）・磁器（高橋照彦）はルイロウⅠ～Ⅳ期を区分する基礎資料である。瓦や磚からは漢・六朝期における技術伝播とその在地化の過程がうかがえ、青磁類は中国南方から一定量の製品が搬入されたと推定される。製作地は不明ながら、中国系の漆耳杯も出土している（黄・村上由美子）。

第VI章は出土資料の科学分析結果を述べたものである。青銅器類の鉛同位体比分析では、華中・華南産原料が用いられた可能性が指摘される（齋藤努）。胎土分析では、瓦の胎土が二群に大別され、また灰釉磚・陶磁器もそれぞれ別グループに属することが判明した（白石純）。インド・パシフィックグループの特徴をもつ黄色不透明のガラス小玉は、蛍光X線分析により高アルミナタイプのソーダガラスであることが確かめられた（大賀克彦・田村朋美）。ほかに金属器の蛍光X線分析とX線CTスキャン（志賀智史）、冶金関連遺物の保存科学的事前調査（比佐陽一郎）、木製品の樹種分析（能城修一）、動植物遺存体の同定（金原正昭ほか）と動物遺存体の観察（鵜澤和宏）、放射性炭素年代測定（米田穰ほか）など、さまざまな分析方法が駆使されている。

第VII章では、新出の石碑・瓦・金銅仏について考察している。

城址東方の清懷廟で近年発見された「晋故使持節冠軍將軍交州牧陶列侯碑」を調査し、呉・西晋の交州牧であった陶璜に關係する碑であることを再確認し、本来は交州廟の建立を記念して呉の建興二年（二五三）にたてられたと推定した（黄）。ルイロウ城址の人面文瓦当については、文様によりAからD型に分類し、A型を前期（後漢・呉）、B・C・D型を後期（呉・西晋）にあてて、現地研究者の考察を掲載する（鄧鴻山・阮文英・阮明雄）。また、城址周辺で発見された金銅仏光背片を紹介し、近年の中国出土例との比較から六世紀に中国で製作されたものと推定した（黄）。

第八章は調査成果をもとにルイロウ遺跡の歴史的性格を考察する（黄）。Ⅰ期は漢武帝の交趾郡設置を起点とし、創設期には内城の濠が存在するのみで、土塁が確認できない。Ⅱ期は土塁が交趾郡太守として活躍した拡張期で、内城の土塁と外城の土塁・濠が加わり、内外二重の城郭が完備する。土塁は後漢末の混乱期に半独立政権をうちたて、そこに中原の士人も数多く身をよせたとい、この時期に本格的な文化の流入があったことは容易に想像できる。その後、陶璜の活躍をへたⅢ期以降の発展期には、前段階の構造を踏襲しつつ断続的に整地や修復がおこなわれた。

このような都市の変遷と、その出土遺物をもとに、ルイロウの歴史的性格を次のようにまとめる。ルイロウは「漢帝国の軍事力・経済力による一方的な併呑」により成立したのではなく「漢文化と在地文化が融合し、穏やかで持続的な文化交流がはかられ」「東アジアと南アジアの結節点・文明の十字路」として繁栄した。それは「従来の征服史観、とりわけ侵略／抵抗といった対立的な概念にもとづく歴史理解」とは整合せず「古代の寛容な文

化理解」（二六〇頁）のもとに発展した都市なのだという。

## 二

ベトナムの歴史において、中国の地域支配を受けた前二世紀から十世紀までのいわゆる北属期は屈辱の時代とされ、遺跡の調査も積極的には進められてこなかった。本書の最も重要な意義は、こうした経緯から未解明の部分が少なかつたルイロウ遺跡の発掘を実現し、その一次資料を考古学と自然科学の手法を駆使して分析し、公表した点にある。現地調査では日本考古学の方法をふまえた層位的発掘と記録がおこなわれ、出土遺物の整理・分析・報告にも日本の考古学者が多数参画している。それを実現させたのは、中国考古学を専門としながらも、長らく日本の大学を拠点に研究を進めてきた編著者の経歴によるところが大きい。

こうした経歴は、本書の研究の前提にもなっている。編著者がルイロウ遺跡に着目したのは、これを漢の植民都市あるいは漢の周辺地域支配の産物とみたのではなく、より柔軟な発想のもとで東アジアの文化交流の実態を解明したいと考えたからである。すでに前世紀より世界の歴史研究は、普遍的な発展法則や一元的な文化伝播よりも地域の歴史的・文化的脈絡を重視する方向へと進んできた。日本の歴史学・考古学研究でもそれは同様である。しかし、現代の中国において、過去の中国王朝の周辺地域支配とかかわる遺跡を調査する際に、文化の伝播と受容の多様なありかたを研究者らが自由に発想できるかといえ、必ずしもそうではない。現代中国の政治的状況と学問的枠組にとらわれない環境にあつて初めて本書の研究が実現したともいえるだろう。

ルイロウ遺跡の調査は、先にみた経緯からベトナム国内では必ずしも積極的に進められてはこなかった。それでも二〇世紀初頭のフランス植民地時代に文献学的考証が開始し、独立後には断続的に考古学的調査も実施されている。一九九八年にはベトナム考古学を専門とする西村昌也が北側土塁付近で銅鼓鑄型片一点を発見して話題となり、それを契機として一九九九年と二〇〇一年にハノイ社会科学人文大学の研究者らと共同発掘を実施している。その調査では、外側の城壁などを試掘し、城郭の時期を二世紀半ばから六世紀前半と判断した。こうした考古学的成果が、後漢の交趾太守周敞のとき郡治が羸婁から龍編に遷され、また六朝期に交趾郡治が龍編に存在したという文献記録と対応することから、この地は羸婁ではなく龍編であると西村は結論づけた。

これに対し本書では、内城濠の建設が前漢代にさかのぼることを根拠に、ルイロウ城址は前漢武帝期に設置された交趾郡治の遺跡で、漢の羸婁県の所在地であるととした。ただ、羸婁県と龍編県の設置はいずれも前漢武帝期にさかのぼり、郡治の有無にかかわらず県として前漢代より存在したから、ルイロウ城址から前漢の遺物が出土する事実のみを根拠として、これを漢の羸婁に比定することはできない。本書がいうように漢の武帝が交趾郡治を設置した羸婁がルイロウ城址であるならば、その後の郡治の変遷を示唆する文献の記録はどのように解釈すべきなのか、諸学説を整理して本書の立場を明確にする必要があるだろう。

一方、紅河流域において、ルイロウ城はコーロア城に次ぐ規模をもち、とりわけ後漢から六朝の中国系遺物を出土する城郭として最大であることから、一定期間この場所に交趾郡治が存在した

可能性はある。後漢・晋・宋・齊の正史はいずれも交趾郡下の県として龍編を筆頭にあげ、交趾郡ないし交州にかかわる重大事件の多くが龍編を舞台としていることから、当該時期の交趾郡の中心が龍編であったことは疑いがない。

二〇〇四年、ルイロウ城址の北西約八〇〇メートルに所在するスアン・クアン寺付近から隋文帝の仁寿舍利塔にかかわる石函と舍利塔銘が発見され、そこには仁寿元年（六〇一）交州龍編県の禪衆寺に舍利を奉安し靈塔を敬造した旨が記されていた。<sup>③</sup>隋代にはすでに羸婁県は存在しないことから、舍利塔銘の記載をもってこの場所が漢代以来の羸婁県ではなく龍編県であると即断することはできないとしても、隋代にこの一帯が龍編県に含まれ、交州を代表する寺院が存在したことは注意してよい。

このように、六朝期の出土遺物や隋文帝の舍利塔銘をみると、ルイロウ城を龍編県とする説には一定の説得力がある。もちろん、六朝期のルイロウ城が龍編県に属し、そこに交趾郡治が置かれていたとしても、前漢の龍編が同じ場所であったとは限らないし、武帝が交趾郡治を置いた羸婁がこの場所でなかったともいえない。羸婁と龍編を同一視する説もある。しかし、ルイロウ城が漢代以来の羸婁であることは決して自明のことではなく、まずその前提を疑ってみることは必要な作業といえるであろう。

### 三

ルイロウ城址の出土遺物は多岐にわたり、そのすべてを検証する能力を評者にはもたない。ここでは遺跡の年代とかかわる瓦磚類を中心として、簡単に論点を整理するにとどめたい。

ルイロウ城址をはじめベトナム各地に分布する人面文瓦当について、かつてはベトナム独自の文様とする解釈があった。しかし今世紀になって南京の六朝建康城（呉の建業）から出土した多数の人面文瓦当が報告され、それらをベトナムの人面文瓦当の原型とする説が主流となった。南京出土瓦当の文様は、おおむね雲文（後漢・呉）↓人面文（呉・西晋）↓獸面文（東晋・南朝）↓蓮華文（東晋後期以降）の順に変遷したと理解されている。

第Ⅴ章によれば、ルイロウ城ではⅠ期（漢代）に雲文瓦当が、Ⅱ期（呉・東晋）以降に人面文瓦当と蓮華文瓦当が用いられたといい、おおむね南京の瓦編年と合致する。ところが、第Ⅶ章の鄧鴻山らの考察はこれと年代観が異なり、前期の人面文瓦当は士燮期（一八七～二二六年）に雲文瓦当および「君宜高官」「位至三公」「萬歲」文字瓦当とあわせて用いられ、後期の人面文瓦当は呉から西晋時代の使用されたと推定する。こうした見解の相違は、出土遺構に対する解釈の差異に起因し、第Ⅴ章ではルイロウ城の造営を前漢武帝期として雲文瓦当がその時期にさかのぼると考えるのに対し、第Ⅶ章のベトナム研究者の考察では士燮期に瓦葺き建物が出現するとみているらしい。

第Ⅴ章ではルイロウⅠ期の丸瓦は凸面に縄叩き目、凹面に糸切り痕があると指摘されている。つまり、Ⅰ期の丸瓦は粘土板桶巻技法によって製作されたことになる。佐川正敏の研究によれば、中国では漢代に泥条盤築技法から粘土紐桶巻技法へと交代したあと、北方では粘土紐桶巻技法が継続し、南方では六朝期に粘土板桶巻技法が出現したとされる。粘土板桶巻技法の瓦は洛陽の後漢の例がふるく、南京周辺では呉の後期には粘土板桶巻技法の平瓦

が出現し、丸瓦の粘土紐から粘土板への転換はそれよりおくれるという。南越宮苑遺址では漢代にさかのぼる粘土板桶巻技法の瓦は確認できず、ルイロウ城址の粘土板桶巻技法の瓦がどこまでさかのぼるのか、検討を継続していく必要がある。

また、ルイロウ城址の造営過程とかかわって問題となるのが、内城の土塁北東隅および北門付近で確認された磚列である。第Ⅲ章第二節では、土塁の盛土最下面に後漢代の磚が整然と敷き詰められていたことを報告し、磚の年代から後漢の遺構とみている。しかし、その磚列に用いられた磚は、規格が統一されておらず文様も多様であり一定の時期差があること、また墓所用の菱形文磚と共通のものが含まれること（二三頁）は注意される。

西村が発掘した南側の城壁では「磚が意図的かつ部分的に壁の芯部をなすように積まれている部分が確認されている」といい、土塁内部に磚積みの基礎を築く工法が存在したと指摘している。類似的の工法はベトナムのチャキウ城址のほか、四川省雒城や広西省興安県秦城遺址などにも認められるという。ルイロウの内城土塁下層で検出された磚敷は、上層の土塁に先行する遺構ではなく、土塁と一体の構造であった可能性も考える必要がある。

#### 四

そのほか、第Ⅶ章第一節に掲載する「晋故使持節冠軍將軍交州牧陶列侯碑」の考察にも若干の問題がある。先行研究がその立碑年代を西晋の建興二年（三一四）とするのに対し、本書は呉の建興二年（二五三）とみる。その根拠は碑陽末尾の「建興貳年九月壬……」の文字で、西晋建興二年が「九月戊辰朔」であるのに対



し、呉の建興二年は「九月壬戌朔」であることから、碑の記載を「建興武年九月壬戌朔」と推定したのである（一三七頁）。

本書も参照している陳垣『二十史朔閏表』<sup>①</sup>をみると、呉の建興二年にあたる魏の嘉平五年九月は確かに壬戌朔で間違いない。しかしこの時期、魏が景初暦を用いたのに対し、呉は乾象暦を用いており、両者の月朔は異なる。例えば同年正月朔日は魏が乙丑で呉は丙寅であり、両者の間には一日のずれがあるため、呉の建興二年九月朔日は壬戌ではなく癸亥となる可能性が高い。さらに、そもそも「建興武年九月壬戌……」の記載だけでは、九月のあとに月朔干支があらわされているかどうかはわからない。むしろ呉の建興二年と西晋の建興二年のいずれとも九月朔日の干支が合致しない以上、もともと碑文は月朔干支を欠いており、「九月壬□日」と記されていたと考えるのが自然であろう。

碑陽三行目「蒼梧太守封丹楊侯」は「呉志」孫皓伝・建衡元年（二六九）に「蒼梧太守陶璜」とあるのに対応する。丹楊侯に封ぜられた事実は史書に記載がないものの、陶璜は丹楊秣陵の人とされ、一定の歴史的事実を反映していた可能性はある。また六行目「持節前將軍交州刺史」は建衡三年（二七二）に呉が交州を攻略した際の功により陶璜にあたえられた「使持節都督交州諸軍事前將軍交州牧」（『晋書』陶璜伝）の称号と一致する。碑文前半の断片的な記載が呉のときの陶璜の事績と対応することはすでに先行研究が指摘し、本書もその可能性を認めている（一二六頁）。碑文中に建衡年間の陶璜の事績が記されている以上、立碑年代をそれよりはやく呉の建興二年とすることはできず、やはり先行研究のように西晋建興二年の立碑とみるべきであろう。

ここまで、本書の成果を概観し、その意義と若干の問題を指摘した。評者はルイロウの遺跡も遺物も実見しておらず、ベトナム考古学の知識もないため、的はずれな批評をしたかもしれない。しかし、本書の刊行により、交趾郡治・ルイロウ遺跡についての情報が大幅に充実したことは間違いない。これまで十分な調査研究がおこなわれてこなかったルイロウ遺跡の国際共同調査を実現した熱意と、発掘終了から一年あまりで多様な出土資料を整理して本書をまとめあげた実行力に、深く敬意を表したい。そして、本書を契機としてルイロウ遺跡に対する国内外の関心がいっそう高まり、継続的な調査研究が実現することを期待したい。

- ① 本書に関連する成果として、次のものがある。黄曉芬編『交趾郡治・ルイロウ遺跡Ⅰ』平成二五～二八年度科学研究費補助金基盤研究A（一般）研究成果報告書、二〇一五年。黄曉芬・鶴間和幸編『東アジア古代都市のネットワークを探る―日・越・中の考古学最前線―』汲古書院、二〇一八年。
- ② 西村昌也「ルンケー城の研究」『ベトナムの考古・古代学』同成社、二〇一一年、一五五～一七六頁。
- ③ 河上麻由子「ベトナムバクニン省出土仁寿舍利塔銘、及びその石函について」『東方学報』八八、二〇二三年、四六一～四六〇頁。
- ④ 山形真理子「ベトナム出土の漢・六朝系瓦」シルクロード調査研究所編『中国シルクロードの変遷』雄山閣、二〇〇七年、二四〇～二七一頁。同「南境の漢・六朝系瓦」『古代』一二九・一三〇、二〇二二年、二四一～二七〇頁。
- ⑤ 賀雲翔『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、二〇〇五年ほか。
- ⑥ 佐川正敏「中国における造瓦技術の変遷」『古代東アジアの造瓦技

術』奈良文化財研究所、二〇一〇年、七七～九五頁。

⑦ 山崎信二「平瓦製作技法からみた古代東アジア造瓦技術の流れ」

『古代東アジアの造瓦技術』奈良文化財研究所、二〇一〇年、四～五頁。

⑧ 佐川正敏「南北朝時代から明時代までの造瓦技術の変遷と変革」

『古代』一二九・一三〇、二〇一二年、二三五～三六頁。

⑨ 前掲西村「ルンケー城の研究」、一五八～一六七頁。

⑩ 陳垣『二十史朔閏表』中華書局、一九六二年、四七頁。

⑪ 丁克順・葉少飛「越南新發現『晋故使持節冠軍將軍交州牧陶列侯碑』初考」『元史及民族与边疆研究集刊』三〇、二〇一五年、一～一頁。

(A4判 一六一頁 口絵八頁 図版二〇頁 二〇一七年三月

フジアンシ出版 税別五四〇〇円)

(京都大学人文科学研究所准教授)